〈研究ノート〉

戦前昭和期沖縄県出身移民の出発港の実態

―神戸移住教養所及び長崎移住教養所の事例―

石　川　友　紀

第二次世界大戦前全国的に「移民県」のひとつであった沖縄県においては、海外へ多くの移民が送り出された。1944年（昭和19）現在南洋群島・満州などを含めると、県の移民数は12万3,842人との記録がある。[1] 同数値は同年の沖縄県の総人口59万0,480人の21.0％をも占めるほど多かった。[2]

沖縄県から海外へ移民が出る場合は、そのほとんどが出身市町村から出発し、県都那覇市へ向かい、渡航の諸手続きをし、那覇港から便船で出帆した。目的地の日本本土の出発港へは、鹿児島などから神戸や横浜へ向かった。北米のハワイ・米本土・カナダなどへの渡航は横浜港から、南米のペルー・ブラジル・アルゼンチンなどへの渡航は神戸港から、東南アジアのフィリピン・インドネシア・シンガポールや太平洋諸島の南洋群島・ニューカレドニア島などへは長崎港、門司港から出航した。

本稿では戦前昭和期海外（外国）への日本本土の出発港となった兵庫県神戸市と長崎県長崎市に創設され、移民の宿泊所ともなった国立の神戸移住教養所及び長崎移住教養所について、その設立目的や施設の内容・運営などを前半に、後半では県移民が同教養所を利用した実態を、移民の証言により明らかにしてみたい。

Ⅰ．神戸移住教養所

まず、神戸移住教養所の名称についてみると、時期的に変遷しているので整理しておこう。同所は1928年（昭和３）国立移民収容所として開設された。1932年（昭和７）に国立の神戸移住教養所に改称され、1941年（昭和16）太平洋戦争勃発により閉鎖された。戦後1952年（昭和27）外務省により、国立の神戸移住斡旋所（のちに移戸移住あっせん所と改称）として再開された。1964年（昭和39）海外移住事業団（現国際協力機構＝ＪＩＣＡ）により神戸移住センターに改称される。2009年（平成21）神戸市立の「海外移住と文化の交流センター」に改称され、現在に至っている。

拓務省の1940年（昭和15）９月に発行された『拓務要覧』昭和14年版によると、神戸移住教養所の設立時の状況をつぎのように記している。

> 従来伯国行移民は出発港たる神戸に於て、所謂移民宿に宿泊して不当なる宿賃を徴せられ、又移民の風紀、衛生、教養等に付極めて遺憾なる情況に置かれて居た。
>
> 茲に於て神戸に移民収容所設置の必要が認められ、昭和２年７月勅令第229号を以て

移民収容所官制の公布を見、同３年２月建築費23万余円を投じ、寝台600台を備へたる総建坪1,800坪の鉄筋コンクリート５階建の収容所の完成を見た。(550頁)

これをみると、関東大震災以後日本政府の補助によるブラジル移民の増加により、1928年に神戸移住教養所の前身である国立移民収容所が神戸市（山本通３丁目）に開設されたことが知られる。その後の同所の運営状況は以下のとおりであった。

昭和３年３月、開所以来伯国行渡航者に対して約10日間無料にて宿泊せしめ、其の期間に移住地の言語、地理、慣習、農業事情等の教養を与へる一方、入移民国たる伯国法規に従ひ種痘、チブス、コレラの予防注射並にトラホーム、寄生虫の検診駆除等を行ひ、専ら移民の衛生、教養に努め相当の効果を挙げて居る。移民を此処に入所せしむるに当っては、先づ渡航に必要なる体格検査を行ひ、之に合格したる者のみを入所せしめるのである。(550頁)

これをみると、ブラジル移民を入所させるに当っては、渡航に必要な体格（身体）検査を行い、これに合格した者のみに、現地で必要な教育を実施しているのである。以下、同書の歴史的経過の記述を要約してたどってみる（550-551頁)。

1929年（昭和４）度には海外への移民の渡航者が増加したため、従来の建物では狭かったので増築し、さらに250台の寝台（ベッド）を増設した。収容開始の1928年（昭和３）３月から1939年（昭和14）３月末までの10年間の収容回数は198回、その収容総日数は1,573日、収容人員は実に12万7,404人の多数に上った。

1932年（昭和７）11月11日、従来の移民収容所は神戸移住教養所と改称され、神戸の移住教養所は主として南米方面への渡航者を収容するようになった。その理由は1933年（昭和８）１月より南洋方面への渡航者のために、長崎市（梅香崎町27）にも移住教養所が設置されたからである。

長崎移住教養所は1933年（昭和８）２月に寝台200台を備えた延坪601坪の鉄筋コンクリート３階建ての建物が完成し、同時に収容事務を開始した。その内容は衛生、教養施設ともにほぼ神戸移住教養所と同じであった。長崎移住教養所は収容開始以来、1939年（昭和14）３月までの６年間に、収容回数が180回、収容総日数が1,662日、収容人員が7,902人であった。

Ⅱ．長崎移住教養所

神戸移住教養所については、これまで前記のとおり戦前13年の歴史があり、よく知られている。しかし、長崎にも神戸より５年おくれて1933年（昭和８）に長崎移住教養所が開設されていたことは、関係者以外にはあまり知られていない。戦後も神戸移住教養所が改称されて再開されたのに対して、長崎移住教養所は再開されることがなく、その跡地に別の

施設として長崎市立市民病院が建設されていることからも忘れ去られようとしている。[3)]

長崎移住教養所は、関西に立地していた神戸移住教養所に対して、移民が多かった九州・沖縄・中四国地域に近接し、また、移民・移住先としての東アジア・東南アジアや南洋群島等に近いという交通の便からしても大きなメリットがあったと言えよう。

1933年（昭和８）１月発行の拓務省拓務局編『拓務時報』第22号の「長崎移住教養所規則及入所案内」によると、同所の詳細な実態が知られる（87-97頁）。1. 規則では第１章通則、第２章入所及退所、第３章衛生及教養、第４章規律の４章26条から成り立つ。2. 入所案内では長崎移住教養所概況、移住教養所の位置、入所者の資格、入所願提出の時期、入所者の特典、携帯荷物、参考（南洋行移住者が長崎移住所に入所せぬ場合と入所する場合との経費の比較）の順に記述されている。

ここでは上記の入所案内のうち、重要と思われるもののみを抜きだしてみよう。長崎移住教養所の創設の意義を以下のように記している（句読点は引用者により付す）。

> 移住者は従来出発港で、外国旅券の査証手続や其の他色々の用務の為、数日間滞在して居たので、移住者の経済的負担も亦渡航上必要な色々の手続を為すにも非常な不利不便があり、又政府が必要な保護教養を為すにしても、極めて遺憾な点がありましたので、数年前より移住者の出発港に、適当なる保護教養機関を設ける必要がありました。（93頁）

そして、長崎移住教養所が創設された施設の状況はつぎのとおりである、としている。

> 愈々（いよいよ）南洋方面行の移住者の為、今回長崎に移住教養所を設置する事になりまして、昭和８年２月長崎市に延坪601坪の鉄筋コンクリート３階建の移住教養所が完成されました。此の移住教養所は長崎県及長崎市が巨額の費用を投じて建築したもので、事務室、収容室（17）、診察室、医務室、薬局、治療室、検便室、消毒室、煖房室等の完備したものであります。（93頁）

移住教養所の位置は長崎市梅香崎町27番地の旧税関跡となっている。入所者の資格は「移住教養所に入所する事が出来る者は、既に旅券の下附又は渡航の許可を受けた南洋方面に渡航する移住者であります。」入所願提出の時期は「渡航許可の通知が県庁から来たら、直ぐに末尾の様式（略）に依り、入所願を出す事を怠ってはなりません。」としている。入所者の特典は以下のとおり５項目もあり、移民にとって同所滞在中の具体的な指示などが記された必要条件なので、以下取り上げておこう。

（１）食事や宿泊は無料：入所者は１週間から10日間位教養所に滞在して、色々必要な教養を受くる事が出来るが、其の間の食事や宿泊は無料です。

（２）旅券の査証は滞在中に受けられます：今迄旅券の査証を受くる為、数日間市内に滞

在し、相当の費用が要ったが、移住教養所に入所した者は、滞在期間に手続を済ませるので、今迄の様な費用は要りません。

（３）旅券の査証幹旋：長崎市には南洋方面に関係ある国の大部分の領事が居り（但しシャムとニュージーランドを除く)、移住教養所の職員が旅券査証の幹旋をして呉れるので、言葉が解らないと云ふ様な心配はありません。

（４）入国に必要な検査は滞在中に受けられます：比律賓群島に渡航する者は、トラホーム、十二指腸虫及種痘等は、出発港の渡航検査所の医官の検査を受ける事になって居るが、長崎移住教養所に入所すれば、滞在中に移住教養所医官の検診を受けられます。

（５）色々必要なる教養を受けられます：移住教養所に滞在中に各受持の講師より、大体の移住国の人情、風俗、習慣其他、農業経営の方法等の御話を聴く事が出来ます。

（６）携帯荷物：郷里より長崎迄送る荷物は、荷造を丁寧にして名札を付け、教養所で受取れる様に配達付で御出しなさい。刀剣類、鉄器類其他の禁制品は教養所の荷物の検査ではねられますから、持って行く事は出来ません。(93－94頁)

Ⅲ. 県出身移民の出発港利用の状況

本項ではこれまで発刊された沖縄県内の市町村史誌の移民・出稼ぎ編に掲載された移民の証言のなかから、戦前神戸移住教養所及び長崎移住教養所を出発港として利用した証言の事例を取り上げる。その検索に当たった市町村史誌は既刊の14市町村であった。[4] 以下、実際に神戸市と長崎市で滞在した経験のある移民の証言は、神戸移住教養所で11件、長崎移住教養所で14件みられた。

1. 神戸移住教養所の証言事例

（１）比嘉政秀（明治41年生。具志川市字上江洲出身)[5]

私がフィリピンに行ったのは、1929年（昭和４）数え22歳のときでした。フィリピンには二つ違いの兄の栄秀がおりましたので、兄の呼び寄せで行きました。（中略）フィリピンに行く旅費は、80円でした。牛を売って作りました。行く前に沖縄で目の検査と十二指腸の検査を受けて旅券を取りましたが、旅券は簡単には取れませんでした。乗った船の名まえは覚えていませんが、那覇港から出て、神戸に着きました。神戸の移民収容所で一週間講習を受けました。神戸からは直航でフィリピンに着きました。

（２）比嘉長盛（大正３年生。北中城村字喜舎場出身)[6]

1930年（昭和５）７月那覇を出港して神戸に行き、神戸移民収容所に２週間滞在して、移民としての心構えなどの講習を受けた。今でも耳に残っているのはブラジルでは、100年の計をもって働けば必ず成功するという訓辞だった。なお、収容所に入ってびっくりしたのは、便所が水洗で電気が灯っていることだった。神戸の夜景にも感嘆した。もんてび

でお丸で神戸を発ち、香港・シンガポール・ダーバン・ケープタウン・リオデジャネイロを経由して８月28日、約45日間の航海でブラジルのサントス港に着いた。船旅は、最初はきつかったが、だんだん慣れ、食べて寝ての単純な毎日だったが、楽しい思い出として残っている。

（３）名幸敬佳（明治43年生。北中城村字熱田出身）[7]

1930年（昭和５）12月16日那覇港を出港し、４日後に、神戸の移民収容所に入所しました。そこで、ブラジル語（ポルトガル語）など習い、年が明けて1931年１月31日、らぷらた丸でブラジルに向けて、神戸港を出港しました。途中、上海・香港・シンガポールを経て、３月19日、48日間の長い航海でブラジルのサントス港に上陸しました。上陸時、革命があり、国内は騒然としていました。それで、休む間もなく汽車に乗せられ、ノロエステ線サンジョアキン駅近くのファゼンダ耕地に行くことになりました。

（４）普天間（新里）かめ（大正11年生。南城市旧佐敷町字新里出身）[8]

1934年（昭和９）５月ごろ、私の家族は神戸の移民収容所（神戸移住教養所）に一週間滞在したのち、サントス丸で神戸港を出航。54日目の７月２日にブラジルのサントス港に着いた。船は香港、アフリカのケープタウンなどを経由した。途中で赤道祭があり、ケープタウンでは一時下船することができた。このときの乗船者は約900人いたそうで、沖縄県人も多かったが、佐敷村出身者は私たちを含め２家族であった。渡航したのは父母と私の３人で、妹は祖母と郷里に残った。移民の形態は、日本国の補助移民であった。呼び寄せ人は、その一年前に渡航していた父の弟に当たるおじの新里敏栄であった。おじはサントスで働いていて、私たちが到着したとき、港まで迎えにきてくれた。

（５）仲村渠喜盛（大正５年生。北中城村字瑞慶覧出身）[9]

1935年（昭和10）旧暦正月２日に神戸へ向け那覇港を出帆した。神戸では移民収容所（神戸移住教養所）に10日間ほどいて、渡航のための諸手続きを済ませ船待ちをした。身体検査は沖縄で行ない合格していた。渡航費用は日本政府が負担するという、いわゆる補助移民であった。支度金として一家族当て150円はあったと記憶している。（中略）神戸を出港したのは同年２月16日、大阪商船（株）の新造船ぶえのすあいれす丸であった。途中香港、シンガポール、コロンボ、ダーバン、ケープタウンを経由して、43日目の３月30日にブラジルのサントス港に着いた。船には移民監督官も同乗していたが、ポルトガル語などの勉強会はなく、ただ移民関係の小冊子が配布されたのみであった。沖縄県出身の同行者では中城村出身者は私たち５人だけであったが、小禄や具志川、今帰仁などの出身者が40人余りいた。

（６）池原カマド（大正６年生。宜野座村字漢那出身）[10]

私が同じ漢那出身の宜野座金一郎の嫁として、呼寄移民でペルーに行ったのは、昭和10年の10月頃で、私が数え年20歳の時でした。それまでは、宜野座尋常高等小学校を出てから、ずっと父の手伝い（おもに畑仕事や、子守）をして暮らしていました。（中略）行く時は那覇から、木曜丸と言う船に乗って神戸に行き、そこからペルーのカイヤオ港に55日位かかって、昭和11年の１月５日に着きました。神戸（神戸移住教養所と思われる）では簡単な検査があり、検査終了後にパスポートが発行されました。船には沢山の人が乗っていて、私と同じ様に、仲田伝徳と言う人の嫁として呼び寄せられた、惣慶の仲田マカさんも乗っていました。また金武の人たちも一緒でした。夫の金一郎、義父の金之助が住んでいた所は、チャンカイ郡のワラル町のヘススデルバイエ耕地でした。

（７）仲宗根昌健（大正11年生。具志川市字上江洲出身）[11]

ブラジルに行ったのは昭和12年（1937）12月29日に那覇を出て、神戸に行きました。あのとき、移民に行く場合は、一応は神戸に一週間くらい収容して、講習を受けてからしか船は出ませんでした。神戸に収容所（神戸移住教養所）があったんです。サントスに上陸したのが翌年の３月11日でした。当時22歳でした。（中略）渡航資金は政府負担で、支度金も50円ありました。あのときの50円は大きかったですよ。ブラジルの領事館を通して、家族移民だから耕地で３カ年の契約で、コーヒー園に行ったわけです。コーヒー園はサンパウロ州モジアナ線アグード耕地でした。

（８）伊礼弘（大正８年生。北谷町字伝道出身）[12]

私がフィリピンのミンダナオ島に渡ったのは、1938年（昭和13）の暮れのことです。当時は、南洋やフィリピンに行くのがブームになっていました。私の生まれた伝道からも、集落自体が小さいのでほかの集落に比べれば人数は少ないですが、先輩や友だちはほとんど行っていました。

渡航前には講習会がありました。那覇の若狭町にあった開洋会館に泊まり込み、朝の８時ごろから講習を受けました。期間は４日間ぐらいで、講師は教員上がりの人だったと思います。講習は「日本人の恥になるような見苦しいことはやらないように」というような内容だったと思いますが、詳しくは覚えていません。フィリピンに渡る日は、親戚や同じ部落の人が軽便鉄道の北谷駅まで、親きょうだいやいとこ、友だち、許嫁の幸子など、親しい人たちは那覇港まで見送りに来てくれました。港では、船に乗る人と見送りの人がお互いテープの端を持って引っ張り合いました。（中略）私が乗船したのは、日本郵船の山城丸という船でした。まず、神戸港まで行きましたが、神戸に着いたら便船の都合で17日間も旅館に泊まることになってしまいました。それだけ宿代がかさむので、一緒に行く人たちは、「早く船が出ないかな」とぼやいていました。神戸にいる間、神戸移住教養所で体格検査や十二指腸虫などの便の検査を受け、兵庫県庁でパスポートをもらいました。神戸港

からはダバオまでは、大阪商船株式会社の湖北丸という船に乗りました。沖縄を出発してからダバオに着くまで、１か月以上かかりました。

（９）平良（知念）清助（大正９年生。南城市旧玉城村字垣花出身）[13]

父は若い頃ブラジルへの出稼ぎの経験があり、ブラジルの話は耳にしていた。また、叔父（知念宇志）も1934年（昭和９）にブラジルへ移民していたので、きっとブラジルは、金稼ぎができるところだと確信をもち、ブラジルに移民することを決意する。当時、日本政府では、海外移民を奨励し、家族での契約移民に対しては、支度費も助成されていたので、従兄までは家族同様にみなされるため、私は又従兄の家族３人、従弟の金城壮定さんと共に行くことにした。運賃や、支度金の助成の恩恵をうることができました。早速そのことを叔父に手紙で知らせる。

1939年（昭和14）３月私が20歳の時、又従兄の家族（３人）と従弟、私とで５人家族を構成し、他の市町村の移民家族と共に那覇港を出発した。神戸の移民収容所（神戸移住教養所）に検査のため、２日間泊まった後、リオデジャネイロ丸にて神戸港を出発し、香港、台湾、シンガポール、アフリカ南部ケープタウンを経由して、46日間を要して目的地サントス港に到着する。

(10) 大城忠助（昭和２年生。南城市旧佐敷町字津波古出身）[14]

1940年（昭和15)、私が佐敷尋常高等小学校高等科２年の一学期に、父から呼び寄せの手紙が届いた。私は学校を中退し、３男兄の忠栄と一緒に同年９月初め、沖縄を発って神戸に行った。神戸の旅館に一週間滞在し、移住斡旋所（神戸移住教養所）に行った。そこで移民の心がまえなどの話を聞き、旅券の交付をうけた。そのとき支度金か知らないが５円（50円か）もらったと思う。

1940年９月13日、ブラジル丸に乗船して神戸を出航。船は米国ロサンゼルスを経由してパナマ運河を通り、南米大陸を南下しながらブラジル北東部のペルナンブッコ、当時の首都だったリオデジャネイロに寄港して積み荷を降ろした。そして神戸を出発してから40日後の10月22日、私たちはサントスに上陸した。同船には字津波古出身の一家族６人が乗船していたことを記憶している。そのほか、多くの沖縄県出身者が乗船していた。航海中、兄と私は日中は甲板で同年代の人たちと相撲をとったり、救命ボートの下で遊んだりしていたので、日焼けしてまっ黒になった。そんなことで、サントス港に迎えにきた父を驚かせたものだった。

(11) 安富祖ヨシ（大正10年生。金武町字金武出身）[15]

昭和15年、夫清七（カンゼク小）の呼寄せで、ブラジルへ渡った。兄の銀重もその４、５年前に渡航しており、まだ20歳だった私は何となく、ブラジルという遠い異国の地へ、あこがれを抱いていた。兄からは手紙がよく届き、国の様子などを知らせてくれ、「リオデ

ジャネイロ」が世界の三大美港らしいという、少しばかりの知識もあった。

那覇港から波の上丸に乗ったはいいが、ひどい船酔いをしてしまい、とても船旅を楽しむゆとりなどなく、これから先の長い道のりを思い、ゆううつになったりした。神戸港に着き、国立移民収容所（神戸移住教養所）で一週間ぐらいブラジルについての講習会を受け、その後パスポートをもらい、ブラジル丸で神戸を出港した。渡航費は日本政府が全額負担する補助移民だったため、支度金として200円を主人の清七が送ってくれた。200円といえば大金。それでも何だかんだと、女性にはいろいろ準備があるもので、決して多い金額ではなかった気がする。今でいう結納金ということか。

2. 長崎移住教養所の証言事例

（1）小橋川作吉（大正４年生。金武町金武出身）[16]

私がフィリピンに移民したのは、昭和９年（1934）20歳の時だった。渡航資金の200円は産業組合からの借入れ。保証人が２人も必要だった。利息が高かったので、早く返済しなければと考えた。船は那覇港を出発して長崎についた。長崎の移住教養所で一週間の移民教育を受けた。長崎からの船は熱田丸で、支那回りしてレイテ島、セブ島、ミンダナオ島のサンボアンガを経由してダバオに着いた。港の近くに領事館があり、そこで試験を受けたが、むずかしかった。

（2）嶺井和（大正７年生。南城市旧玉城村字富里出身）[17]

1927年（昭和２）２月、主人（嶺井小二郎）が、新天地を求めて、単身でフィリピンに渡航したのが18歳の時でした。それから８年後、親のすすめもあって、私が写真見合いで、フィリピンにいる主人の元へ嫁いだのが17歳で、昭和９年９月のことでした。（中略）昭和９年９月初旬、親兄弟や友達に見送られ、故郷を後にし、船で長崎の移民収容所（長崎移住教養所）に向かい、身体検査や英字の講習などを受け、香港、マニラ経由でダバオに着きました。ダバオでは、主人が船に上がって迎えに来ていました。初めて会う主人は、日焼けして色も黒く、９歳も年上だったので、当時はおじさんにみえて、びっくりしました。船上で領事館の方の立ち合いの下でお見合いをし、確かに結婚するためにダバオに来た事が間違いないことが分かり、下船許可が出たのです。

（3）照屋康三（大正２年生。南城市旧大里村字古堅出身）[18]

1936年（昭和11）、24歳にフィリピンへ渡航しました。旧盆は長崎にいましたので、多分、新暦の８月頃に沖縄を出たと思いますが、日にちははっきり覚えていません。那覇から鹿児島に渡り、汽車で長崎に行きました。一週間移民収容所（長崎移住教養所）に滞在し、それから船に乗りました。長崎にいた時には、スペイン語の勉強をさせられました。身体検査がありましたが、特に淋病の検査は詳しくされました。移民地に淋病を持って行っては困る、と言う看護婦の話でした。船は日本の船で、豪州（オーストラリア）行き

の加茂丸でした。フィリピンに渡る沖縄の人たちも乗っていましたが、ほとんどの人がマニラで降りました。漁師だと言っていました。フィリピンのミンダナオ島ダバオでは、沖の方に船は停泊し、ポンポン船に乗り換えて上陸しました。

（４）又吉榮吉（明治43年生。北中城村字島袋出身）[19]

1935年（昭和10）、ちょうど私が結婚した年に、次兄がフィリピンから一時帰国していました。家を建てるためにです。あの頃、カーラヤ（瓦家）を建てるのは大変なことでしたが、次兄はそれをやりとげました。その次兄が「フィリピンは土地が広くて、みな小作だが、儲かっている。フィリピンのお金が沖縄では２倍になる」という話でした。「頑張ったら、カーラヤーも建てられるかな」と思い、次兄と相談して私たちも行くことにしました。妻ナヲとふたり分、合わせて200円くらい旅費として、次兄に工面してもらいました。旅券が下りたのは長崎の移民教習所（長崎移住教養所）に行ってからでした。そこに一週間ほど滞在し、眼と十二指腸の検査を受け、スペイン語の講習も受けました。そして1936年（昭和11）６月、私たちは長崎港からフィリピンに発ちました。ミンダナオ島のダバオに着き、私たちはまず旅費を出してくれた次兄のところに落ち着きました。そこで８か月間働いて、借りた旅費を返済しました。

（５）小波津厚一（大正５年生。南城市旧佐敷町字仲伊保出身）[20]

1937年（昭和12）７月７日、中国・北京で「シナ事変（日中戦争）」の端緒となった蘆溝橋事件が起きました。私がフィリピンに向けて那覇を発ったのは、同事件の一週間後の７月14日でしたが、戦争が拡大し続けることになろうとは、そのときは予想だにしませんでした。出発前に私は波の上宮に寄りました。そして宮司に頼んで、「奮励努力」という言葉を白いハンカチに書いてもらい、それをお守りとしてふところにしのばせました。７月19日に長崎に着き、同地の移住教養所に入所しました。そのときの記念写真を見ると、私たちは第119回の入所者であったことが分かります。入所期間は一週間くらいでした。入所者はそこで身体検査を受け、かんたんなスペイン語や、また日本語の読み書きなどの講習を受けました。日本人なのになぜ日本語か、不思議に思うでしょうが、入所者のなかには小学校４年生程度の読本（当時、学校などで使った国語の教科書）さえ、読めない人がいたのです。佐敷から同期（119回入所者）でフィリピンに行った人はあまりいなかったように思います。私は同じ字仲伊保の小波津守行さんと一緒になりました。彼は当初、ブラジルに行く予定だったそうですが、何かの都合でフィリピンに変更したと話していました。ダバオ到着後、彼はカリナン耕地に行き、私とは別々になりました。

（６）吉田松蔵（大正６年生。金武町字金武出身）[21]

昭和10年（1935）前後の当時の金武は、我もわれもと青年たちの心は移民熱であふれていた。青年たちは我先にと海外へ移住していて、残された青年は肩身のせまい思いをして

いた。私も当時、約3,000坪程度の農業をしていたが、ほかの青年と同じくフィリピンへ移民するのが夢であった。さいわい、兄から200円の仕送りがあったので、自分の夢を実現することができた。金武では第一回目の召集兵の見送りがあった昭和12年９月満20歳の時、沖縄を発った。最初は長崎の移民収容所（長崎移住教養所）で移民のための教育をうけてから、熱田丸に乗ってフィリピンへ向かった。途中、香港などに寄港したが13日ぐらいかかってフィリピンのミンダナオ島のダバオに着いた。私はおじさんの伊芸幸造さん（カーヌウィー）の所で働いた。おじは大々的に麻栽培をやっていた。現地人も通常２、３人雇っていて、食事は当時の沖縄とくらべると想像以上に豊かであった。

（７）仲間勝（大正９年生。金武町金武出身）[22]

私は昭和12年（1937）、18歳で自由移民としてフィリピンに移住した。当時、漢那憲栄さんが所長であった海外開洋会館への入所は私が第一号であった。漢那さんはおじの安富祖松蔵さん（クハン小）と師範時代の同級生ということで親交があり、移民手続などは開洋会館でやっていた。那覇港から鹿児島経由して長崎の移住教養所で研修を終え、台湾経由して約６、７日でフィリピンのミンダナオ島のダバオの港へ着く。旅費は親が出してくれた。兄徹夫の家族、親戚で朝栄の家族、亀助の家族もすでに移住していたので、不安なく移住できた。移住地は学校ビヤオで、約１万坪ぐらい仲間銀栄（クブマージャ）といっしょに現地人から借用して麻栽培に従事した。

（８）与儀実清（大正３年生。宜野座村字宜野座出身）[23]

昭和12年（1937）の11月下旬、私はフィリピンへ移民するために那覇港を出ました。その頃、大陸では日中戦争が勃発しており、世の中も次第に戦時色を帯びてきた頃でした。フィリピン移民として最後の方だったと思います。当時はまだ移民熱が盛んで、私も外地で一稼ぎしてみたいという思いがありました。叔父の仲地清徳がミンダナオ島ダバオのカリナン日本人小学校で教員をしていて、何か適当な仕事を探してやるから、来るようにとの話もありました。旅費はいくらかかったか良く覚えていませんが、家が宜野座では豪農の方だったので父親が全部出してくれました。

那覇港を出て４日後に長崎港に着き、長崎市内の移民収容所（長崎移住教養所）に約２週間滞在して伝染病の検査を受けました。12月の中旬、吉野丸という船に乗り長崎港を出て、12月30日にダバオ港に着きました。途中、香港とマニラに寄港しましたが、香港ではコレラが流行していて上陸を拒否されました。ダバオ上陸後、叔父の仲地清徳から会社とか学校の事務の仕事をしてみないかという話がありましたが、私は広い所で思い切って農業をしてみたいという望みがあったので、別の叔父の仲地清栄と清善が共同で経営していた麻山で働くことにしました。

（９）津波古正人（大正11年生。南城市旧玉城村字奥武出身）[24]

昭和12年７月父の病が重くなり面会のため、兄蒲吉が比律賓より帰国したが、看病の甲斐もなく父は不帰の客となった。享年55歳。自分が15歳の９月６日だった。故父の弔いも済みしばらくして、兄は比律賓へ姉は東京へと故里を後にした。11月再渡航した兄が自分と同年の兄の長男正雄と２人呼寄せる事になった。早速移民会社へ申込み諸手続きを済ませ、眼や十二指腸虫の検査も２人一回で合格した。渡航前に現地の状況や日常の常識などの教養講習のため、那覇市若狭町の開洋会館で一週間宿泊し、英語のアルファベットやスペイン語の数字の読み方などを学んだ。

昭和13年16歳のとき、４月５日那覇港を出港し、３日目に鹿児島着。一泊して翌日汽車で長崎に向う。長崎では移住教養所に宿泊。ここでも眼や十二指腸虫の再検査が行われた。合格者は米国領事館でビザの交付を受け、教養所で各種の手続きや講習なども行われた。４月17日メキシコ丸で長崎を出港した。３日目に台湾の基隆港に入港し翌日出港、途中高雄港に一時寄港した。４月25日朝マニラ港に入港。出迎えの田中さんや兄、姉と共に田中養鶏場へ着いた。

(10) 伊芸萬栄（大正９年生。金武町字金武出身）[25]

私は昭和13年（1938)、フィリピンへ渡航した。渡航費は借入れで、当時の金で300円ぐらいかかったと思う。渡航経路は那覇から鹿児島に上陸し、汽車で長崎に着く。長崎で、手続やフィリピン現地でのちょっとした言葉の修業などで一週間滞在した。ダバオではドムイ耕地で、おじさんの麻山の草取りの手伝いをした。なれてくると麻の葉を落とす作業、倒す仕事など、しだいにむつかしい仕事に移って行く。麻を倒す仕事はなれないうちは、倒れてくる麻木の下敷きになる時があった。いい麻山では４、５メートルにもなるからひどい目にあう。麻山の土地は肥えていて肥料を入れる必要はなく、草取りさえすれば事済んだ。麻（マニラ麻、現地語でアバカ）は熟するとバナナみたいに花が咲く。その時葉を落とし、茎を倒し、皮をはぎ、機械でひく。おじさんのところではこの麻ひきの時だけ現地人を使っていた。

(11) 宜野座仙五郎（大正10年生。金武町字金武出身）[26]

私は昭和13年（1938）７月、数え18歳の時、義兄仲間盛正の呼寄せでフィリピンに渡航した。（中略）私が渡航したころは、新移民の渡航可能な昭和14年の前年だった。午後４時那覇港を出港し、翌々日の午前８時鹿児島に着いた。その日の汽車で長崎に着き、そこ（長崎移住教養所）で一週間ほど滞在、身体検査（トラホーム、十二指腸、性病など）や講習などを受けた。身体検査で不合格し、沖縄に帰される人もいた。

長崎からフィリピン向けの移民船には大阪商船のガンジス丸と日本郵船の熱田丸があった。私は呼寄せ専用の船、ガンジス丸に乗船した。熱田丸は香港、アモイ経由だったようだが、ガンジス丸は台湾の基隆、高雄、マニラ、セブ、イロイロを経由してダバオに着い

た。上陸後税関で荷物を一時的にあずけ、その日は新里旅館で一泊した。翌朝荷物を取る前にちょっとした検査があり、それがすむとそれぞれの目的地へ向かった。

(12) **仲間徳栄**（大正９年生。金武町字金武出身）[27]

私は昭和13年（1938)、18歳の時フィリピンに渡航した。（中略）渡航経路は那覇港から船で鹿児島に着き、そこから汽車で長崎に向かい、移住教養所というところで約一週間程度、簡単なスペイン語の講習と身体検査があった。長崎からフィリピンに向け出港する船には二通りあって、呼寄移民は大阪商船のガンジス丸、自由移民は日本郵船の熱田丸だった。私は兄の呼寄せだったのでガンジス丸だった。乗船者は200人ぐらいだったと思う。

船は上海に寄港後台湾の基隆に着き、そこで希望者は下船して汽車に乗り移り、高雄で再びガンジス丸に乗船するてはずになっていた。高雄出港後は、フィリピンのマニラ、セブ、イロイロなどを経由してダバオ市のサンターナに着いた。同船者にはナカシの伊芸萬栄（大城孝蔵の銅像建立の件で再渡航）さん、ペーキーの徳勇、弟の徳夫、姉のグジ（キク)、ウィメージの栄明、ウーグスクージの嫁になったモーシ、シチャラの静子、その妹の初江など金武の人が大勢いた。港に着くと旅館で一泊した。マチムトの新里武太郎の経営する旅館である。そのほか沖縄からの移民がよく利用したところは上原旅館と並里旅館があったが、金武からの移民は、ほとんど新里旅館を利用した。

(13) **大城昌盛**（大正４年生。北中城村字和仁屋出身）[28]

1937年（昭和12）には中国との戦争が起こり、大変なことになると思い、ダバオの長兄に呼び寄せてくれるようにと依頼の手紙を送った。翌1938年の夏、23歳のとき、長兄の呼び寄せでダバオへ行くことになった。沖縄から多くの人が一緒に長崎に行った。そこの移民会館（長崎移住教養所）で一週間ぐらい滞在し、眼の検査などをした。兄からの180円の送金があったので、それを渡航費用に当てた。９月中旬に4,000トン級のガンジス丸という船でダバオに向かった。船では、一時帰沖してフィリピンに戻る本部出身の夫妻と懇意になりよく話し合った。奥さんは、フィリピンのバゴボ族の人ということだった。船がダバオ港に着くと兄が迎えに来ていて、すぐ車でイラム耕地近くのバゴという麻山に向かった。バゴに着くまで周囲は麻山ばかりだった。道はデコボコ道であった。

(14) **町田サダ**（大正８年生。北谷町平安山ヌ上屋取出身）[29]

私は1939年（昭和14)、20歳のときに、ダバオに渡ることになりました。同じ平安山ヌ上屋取の出身で、ロレンソ耕地で麻栽培をしていた町田宗牛（屋号新家勢理客小）と結婚するためです。宗牛は1930年（昭和５）にダバオに渡っていました。同じ部落の出身ということもあり、父と向こうで親しくしていたようです。（中略）渡航前には、近い親戚や友だちが家に集まってくれて、餞別をもらいました。当時は、餞別といえばたいてい20銭で、親戚や友人だと50銭というのが相場でした。まず、平安山駅から軽便鉄道で那覇に向

かいました。平安山駅は家から歩いて６～７分の距離にあり、友だちや隣近所の人たちが駅まで見送りに来てくれました。近い親戚は、那覇まで見送りに来てくれました。那覇で一泊したあと、船で長崎まで行きました。

長崎では、長崎移住教養所に一週間ぐらい滞在しました。そこで、目や便の検査を受けたり、ローマ字の講習を受けたりしました。自分の名前ぐらいはローマ字で書かないと検査が通らないということで、これを覚えるのも大変でした。また、日本では明治や大正などの元号で通用しますが、向こうは外国なので西暦しか通用せず、自分の生年月日を西暦で言うという講習もありました。私は、同じ部屋にいた二つ年上の泡瀬出身の人と仲良くなりました。（中略）それから、私たちはフィリピンに向かいました。沖縄からは、約50人が一緒に行ったと思います。同じ部落の松島良元さん夫婦も一緒の船になり、お互いロレンソ耕地に入りました。

Ⅳ．むすびにかえて

以上、第二次世界大戦前昭和期の沖縄県出身移民の出発港の実態と題して、神戸移住教養所及び長崎移住教養所の設立状況やその内容などを前半で、後半では両移住教養所における県出身移民が海外出発直前と渡航中の状況などについての証言の事例を取り上げた。

本項ではむすびにかえて、神戸及び長崎両移住教養所についての研究が少ないなかで、先行研究として以下４人の研究論文を挙げて、参考に供しよう。

黒田公男は1984年国際協力事業団編の『移住研究』No.21に「神戸移民収容ノート」（1-11頁）と題して、神戸移住教養所の歴史を、神戸市との関連も含めて掲載している。その一部を抜粋してみると、以下のとおりであった。

> ブラジル移住華やかだった昭和初期の神戸は、現在と違った意味の活気があった。外国船が出入りして国際色豊かなミナト神戸に、全国から新天地ブラジルを目指す多くの人たちが、続々と集結した。諸和８、９年は年間２万人を超す移住者が海を渡った。その基地は国立移民収容所（神戸移住教養所、戦後海外移住センターに改称）だった。
>
> 移民収容所は昭和３年３月７日、神戸の山手（生田区山本通４、現在の異人館に隣接）にブラジル移住者の拠点として誕生した。当時神戸はブラジルに一番近い所だった。笠戸丸以来ブラジル移住者のほとんどが神戸港で乗船したからである。神戸港は日本列島の中央に位置し、移住者の多い沖縄、九州、中国に近い有利性が、中央官庁のおひざ元の横浜港を抑えて建設にこぎつけたわけだが、神戸に立地した最大の理由は、地元の盛り上がる熱意と実行力に負うところ大である。日伯協会を中心にした兵庫県、神戸市の肩入れが、実現に大きな作用したと思われる。（１頁）

そして、神戸移住教養所が太平洋戦争の勃発により閉鎖された状況を、つぎのように記している。

米英に宣戦布告した（昭和）16年の６月に神戸を出港したぶえのすあいれす丸が戦前最後の移民船となり、戦後再開するまでの11年間は、ブラジル移住の空白期間となった。満州移民は郷里から団体で直接出発したので、移住教養所を使用しなかった。そのため教養所は６月末で閉鎖のやむなきに至った。移民収容所建設から戦前の閉鎖まで13年間、10万人以上が寄せては返す波のように移住者が来て、去って行った。（11頁）

山田宙子は1986年外務省領事移住部編の『移住情報』通巻第97号に「わが国海外移住の足跡―「移住教養所」設立までの経緯―」（17-26頁）と題して、神戸移住教養所について、その前史より設立時まで、外務省記録からその実態を掘り起こしている。山田は冒頭つぎのような記述をしている。

石川達三の「蒼氓（そうぼう）」は昭和初期、最盛期のブラジル行移住者を主人公とした小説である。この小説は、「神戸移民収容所」（後に教養所と改称）」を舞台に出発までの８日間を題材としたものであるが、昭和期に入ってからは、移住者たちは「収容所」に収容され、短期間ではあるが渡航先の状況、風俗習慣、簡単な外国語の会話の講習を受けた後、ブラジルへと出発して行った。今回は、移住者に対する施設「移民収容所」について、その設置の経緯を追ってみることとしたい。（17頁）

以下、論文は検査所、講習所、教養（収容）所、神戸協和寮の項目の順に解説を行い、国立の神戸移民収容所は、移住者たちに対して各種の講習を行なう「講習所」、身体検査や予防接種等を行なう「検査所」、移住者たちを出発までの間滞在させる「宿泊所」としての３つの役割を果たした、と結論づけている。（17頁）

木村健二は1997年『社会科学討究』第124号に「戦前期「移民収容所」政策と異文化教育」（355-384頁）と題して、移民収容所について、その設立の経緯としての前史、政府補助金支給、国営移民収容所の建設、講習内容としてのカリキュラム、在外公館報告にみる注意事項の項目の順に詳細に記述している。「おわりに」で移民収容所について、以下のように結論づけ、同研究論文の課題も述べている。

移民収容所は身体検査と講習を主に、当初は県や民間団体で、のちには国営で実施された。それは、当初はアメリカ、のちにはブラジルにおける排日問題を配慮する外務省のリーダーシップで実施されていったとみてよい。つまり、これらの国で進行する排日の動きをできるだけ緩和しようという観点から、トラホーム・寄生虫などの健康チェックや宗教・風俗習慣など出先国事情の講習を行ったのである。（中略）以上の考察は、主として講習を行う側の、しかも間接的な資料をもとにしたものでしかなかった。今後は、こうした基本的方針が、実際の講習の場でどのように展開されたのか、そしてそれ

を受け止める側にはどのようなに定着・浸透したかが検討されなければならない。(374頁)

坂口満広は2011年日本移民学会編の『移民研究と多文化共生』御茶の水書房に「出移民の記憶」(80-103頁)と題して、そのなかでブラジルへ渡った移民について、政府による移民奨励策とそのプロセスを解説している。すなわち、渡航手続き、乗船の日まで、移民船、配耕の項目の順に記述し、移住教養所については以下のような指摘をしている。

各種手続きが済んでもブラジル移民はトラホーム検疫や身体検査で合格がでるまで10日間ほど移民宿で過ごさねばならなかった。家族連れであったことからその出費も少なくなかった。日伯協会の働きかけもあって1928年、神戸に国立移民収容所(1932年に移住教養所と改称)が設けられ、すべての移民の滞在費を国費で賄った。1932年以降は、拓務省から渡航準備金(満12歳以上一人につき50円、年齢に応じて半減)が支給された。昭和恐慌下でもあり、ブラジル移住希望者は一気に増えたのである。(89頁)

このほか、戦前昭和期の移住教養所関連の研究論文等があるかもしれないが、現在のところみつからなかった。本稿の後半では、沖縄県出身移民が郷里や那覇港を出発し、神戸移住教養所及び長崎移住教養所に約一週間滞在した25件の証言の事例を記した。日本最後の夜を過した出発港神戸や長崎の街での経験は、移民にとってなつかしい記憶としてよみがえってきたのであろう。そして、まだ見ぬあこがれの外国へ、夢と希望を持ち、海外へ雄飛して行ったにちがいない。

注

1)石川友紀(2001)「沖縄移民展開の背景と足跡」『南島文化』第23号、71頁、沖縄国際大学南島文化研究所、参照。
2)石川友紀(2012)「4. 住民と生活、1)人口構成」野澤秀樹・堂前亮平・手塚章編『日本の地誌10　九州・沖縄』表Ⅳ. 4. 1、546頁、朝倉書店、参照。
3)石川友紀(2010)「九州福岡・佐賀・長崎・熊本4県の移民資料調査報告」『ＪＩＣＡ横浜　海外移住資料館　研究紀要』4、35頁、参照。
4)石川友紀(2011)「第5部沖縄移民の諸相　第5章沖縄移民史の課題と展望」沖縄県文化振興会史料編集室編『沖縄県史』各論編第5巻、近代、表1移民・出稼ぎ編を含む市町村史誌、466-468頁、沖縄県教育委員会、参照。
5)具志川市史編さん委員会編(2002)『具志川市史』第4巻、移民・出稼ぎ、証言編、840頁、具志川市教育委員会。
6)北中城村史編纂委員会編(2001)『北中城村史』第3巻、移民・本編、380頁、北中城村役場。

7）前掲注６）『北中城村史』第３巻、376-377頁。
8）佐敷町史編集委員会編（2004）『佐敷町史』五、移民、245頁、佐敷町役場。
9）前掲注６）『北中城村史』第３巻、385-386頁。
10）宜野座村誌編集委員会編（1987）『宜野座村誌』第２巻、移民・開墾・戦争体験、27頁、宜野座村役場。
11）前掲注５）『具志川市史』第４巻、282頁。
12）北谷町史編集委員会編（2006）『北谷町史』附巻、移民・出稼ぎ編、533-534頁、北谷町教育委員会。
13）玉城村史編集委員会編（2005）『玉城村史』第７巻、移民編、289-290頁、玉城村役場。
14）前掲注８）『佐敷町史』五、258-260頁。
15）金武町史編さん委員会編（1996）『金武町史』第１巻、移民・証言編、321-322頁、金武町教育委員会。
16）前掲注15）『金武町史』第１巻、248頁。
17）前掲注13）『玉城村史』第７巻、455-456頁。
18）大里村移民史編集委員会編（2003）『大里村史』移民本編、515-516頁、大里村役場。
19）前掲注６）『北中城村史』第３巻、476頁。
20）前掲注８）『佐敷町史』五、329-333頁。
21）前掲注15）『金武町史』第１巻、137頁。
22）前掲注15）『金武町史』第１巻、182頁。
23）前掲注10）『宜野座村誌』第２巻、111-112頁。
24）前掲注13）『玉城村史』第７巻、450頁。
25）前掲注15）『金武町史』第１巻、119頁。
26）前掲注15）『金武町史』第１巻、171頁。
27）前掲注15）『金武町史』第１巻、178-179頁。
28）前掲注６）『北中城村史』第３巻、500-501頁。
29）前掲注12）『北谷町史』附巻、538-540頁。

写真１、神戸移住教養所（現「海外移住と文化の交流センター」のパンフレットより）

写真２、長崎移住教養所（拓務省拓務局『拓務時報』第28号、昭和８年７月、口絵より）